さらに刊本ではこの後に附録三巻があり、これは補注として訳者が附したものだが、初訳本ではこれがない。初訳の段階ではそこまで作らなかったのだろう。

以上のようにこの初訳本は未定稿の性格を持っているが、これと同系統の写本として、佐倉順天堂旧蔵本と土肥慶蔵氏旧蔵本があることを確かめた。未定稿のまま筆写され利用されたものと思われる。

（七沢リハビリテーション病院診療部）

三瀬諸淵訳『兪里伊羅安検査書』について

会田　恵・寺畑　喜朔

本書は『和蘭語尿検査書』が三瀬諸淵により訳述された筆写による和書で、三十二頁と巻末に不審として二頁の覚え書きが付してある。慶応大北里記念医学図書館の富士川本の一冊以外は知られていないものと考えられる。

本書を寺畑が尿検査書として既に十年前に年代不詳として着目しているが（日医史昭五十二・二十三(二)二二五）、最近我々は共同調査をすすめた。訳出の時期と原本は不明であり、未刊行で訳稿をまとめた程度のものとみられる。内容の化学的記載など、我が国近代医学の臨床検査受容の濫觴として意義深い訳本であり、巻末の覚え書きは当時の全く新しい医学検査にとまどっている状況も伝え（スライド説明）貴重な資料と考えられる。

冒頭には病床教授ユリーラー検査書と題してあり、次に

『大洲藩三瀬周造諸品訳稿』と手書きで書かれてある。訳出の時期については、巻末に近い第五疑第八の項に「一千八百六十二年（我文久二壬戌年）刊行和蘭医事日記中我曹歴験二條ヲ載テ之ヲ布告シタリ」とあるので、文久二年（三瀬二十四歳）以後の訳であり、原本は内容の一部の片仮名の術語から考えてもオランダ語医書であるものと考えられる。

三瀬は周知の通り二宮敬作の甥であり、シーボルトの名通詞であり、蘭独英語に秀いで、江戸末期より明治十年まで医学のみならず幅広い活動を行い、三十九歳にて歿した傑人である。その訳書は夥しい数で、訳書および原稿等は「三箇の大長持にギッシリあったそうであるが、現在散逸して所在不明である」と言われ、本書のような尿検査書は当時は未だ関心は少なく、我が国には筆写する者も稀であったものと考えられるし、また注目されないままに本書についても不明の点も多いものと考えられる。松山市において既刊の三瀬に関する資料伝記（昭和に入り五種出版）を調べても本書についての記載はみられない。

本書の各章と主たる項目は次の通りである。

第一疑　一般注意　　尿検査に要須の品
　　試薬及ビ溶解品ニ入用ナルモノ
第二疑　常規尿理学底舎密禀性
第三疑　常規尿
第四疑　非常尿理学底舎密禀性
第五疑　尿内非常成分顕示
　第一　蛋白
　第二　血
　第三　膿
　第四　胆汁色素
　第五　胆汁酸
　第六　葡萄糖
　第七　安母扭亜抱合物
　第八　癌腫説爾　結核塊　脂肪　滲液柱　内皮様
　　腎管　精条　海綿状息内　徴(?)細虫　胞
　　蟲胞　レウシ子　チロシ子　蓚酸加爾基
　第九　規尼涅
　第十　沃曹母
第十一　鉛　銅　亜爾没尼幾汞

巻末に前述の覚え書きが付してあり、その最後に「貴重ノ検査法モ……」とある。

ところでほぼ同じ頃の尿検査訳書として『検尿要訣』（足立寛訳述）があり、両書を比較することにより、同時代のヨーロッパにおける尿検査の趨勢が推察出来るが、内容の相違も興味深い。さらに足立寛が大学東校大助教授としてこれを訳述しており、当時化学教授及び同施術を担当していたことは三瀬の本書の訳出の動機を考察するうえで注目される状況である。因みに『検尿要訣』の発刊も不詳であるが会田は明治五年頃と推定している。

本書の訳出の時期であるが、前述のように文久二年以後としても本書は当時としては、極めて新しい医学書であるので、三瀬が慶応三年十一月に政府の命によって大阪へ出て、病院設立の準備に入る時期つまり医学への道に入ってからの時代、しかもその頃長崎に出て蘭医ボードウィンに会っており、この頃以後に本書入手又は訳出の可能性が高いと考えられる。明治二年二月に大阪仮病院、同年九月に大阪病院が開かれた以後の訳書については一通り知られているので、本書の訳出終了は明治元年から二年にかけての時期ではないかと推察する。

（柏崎市）（金沢医大）